

ぼくのかんがえた さいきょうの ぎじんか

三枝

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

萌えっ娘もんすたあの世界に転生して女の子とイチャつくだけという、最高に頭の悪い小説がこちらとなっております。ご査収ください。

目次

1話から殿堂入り	1
買い出しとかする2話	8

1話から殿堂入り

新緑の季節。草木は芽吹き春の風が桜を攫って、人は新たな環境に想いを馳せる。

さて、今ポケモンリーグを前にして、その大きさに気を吞まれながらも一步踏み出そうとしているこの少年は、この世界でも極めて一般的なポケモントレーナーの形と言える。

一般にポケモントレーナーとはスティックに強さを追い求める者とされる。

その果てにあるのが、多くのポケモントレーナーがしのぎを削るポケモンリーグ。

この施設での一番の実力者、チャンピオンを打ち倒す事が出来れば、晴れて地方最強のポケモントレーナーを名乗る事が出来る。

対外的に実力を証明する手段であり、それ自体が究極の名誉だ。

少年は遥かワカバタウンから訪れし田舎者。

出身地が大都市であればある程ポケモンを育成するための設備や環境が豊富である事を考慮すれば、のどかな地方出身者である事はそれだけでデイスアドバンテージだ。

しかし少年にはそれを補って余りある大きな資質を持ち合わせている。

後少し手を伸ばせば、王座に届く程に。

そんな少年はしかし、一步を踏み出したはいいものの出鼻を挫かれていた。

足を踏み入れてすぐ、挑戦者案内用の通路を塞ぐように立っている若い警備員を見掛けたからだ。

恐らくリーグで何か問題でも起こって、一時的に封鎖でもしているのだろう。

せっかく気持ちを引き締めた途端にこれでは、仲間達も消化不良というもの。

ポケットのモンスターボールの震えを感じながら、逸る気持ちを抑えて努めて冷静に、警備員の青年に話し掛ける。

「あの、リーグに挑戦したいんですけど……なにかあったんですか?」
「ああ、挑戦者の方ですか……リーグは現在調整期間なので、1〜2カ月の後、機会を改めてまたいらしてほしい、と上から伺っております」
以前、いざリーグ戦に挑戦しようと来てみたら、調整期間によって1カ月程も待ちぼうけを食らってしまったトレーナーの話を読んだ事がある。

恐らくそういう事だろう。

リーグ戦で戦う事になる四天王やチャンピオンだって人間である以上、調整が必要な事もある。

例えば、確定申告や年度末決算等の事務手続き、ポケモンや自身の急病、定年退職、それに伴う欠員の補充等、理由は多岐に渡る。

リーグの企業努力によって調整期間は1年に1〜2カ月程に抑えられてはいるが、すぐにでも雌雄を決したいトレーナーにはその期間は長すぎる。

丁度調整期間にあたってしまった少年には、リーグを糾弾するつもりはなくとも、せめて調整期間に入った理由くらいは訊いておきたい思いだった。

少年の記憶が正しければ、ポケモンリーグは少し前にも調整期間を設けていた筈だ。

余程リーグ内が混迷を極めていなければ、調整期間がこんなにも短期間で連続するという前代未聞の問題にはならない。

「実は、チャンピオンを打ち倒したある挑戦者の方が記念撮影の後に行方をくらませてしまったらしく……リーグとしても地方最強レベルの実力者をメディアで報道する事なくみすみす逃すわけにはいかないらしく、極秘で捜索をしていて運営どころではないとか」

「……は?」

「あつ、この話、ここだけでお願いしますよ。俺も先輩からこつそり訊いたんですから」

ワカバタウンの少年は、リーグ戦を目前にしてなんかよくわからんアホみたいなトレーナーに迷惑を被っていた。

「追っ手がこの町まで迫ってきているようです。今日のところは外出を控えた方が賢明かと愚考します」

「愚考なんて言わないでくれ。いつも助けられてるよ、ありがとれでい」

少しかがんで、と頼んで、俺より背の高いれでのサラサラな緑髪を撫でる。

優しい手触りが心地良い。

優しいような眼差しの垂れ目お姉さんは目を細めて気持ち良さそうに、されるがままになっている。

華美な緑の刺繍の入った丈の長いエプロンは貞淑さを感じさせる。ふりふりのフリルの下からふんわり広がるジャンパースカートの、髪の色と同じ若草色をしている。

スカートと同じように腰までふわふわ広がる、ゆったりした癖のある新緑みたいな緑髪からシャンプーの香りがする。

彼女はれでい。人型のドレディアで、うちのパーティのエースだ。もう3日前になる。

俺はポケモンリーグでチャンピオンを倒し、証拠となるトロフィーを受け取ってからバレないように施設をさっさと抜け出して、煩わしい事後処理を全部放り出して故郷のマサラタウンに帰ってきた。

「御主人様の御手を煩わせるなど……いけません……♪」

「よーしよしよしよし」

ガーディ撫でてるみたいな髪質。

撫でてる側も気持ち良いからもつとわがままに求めてくれても構わないのに。

カントー、ジョウト地方のチャンピオンを倒して思う事は2つ。
1つは充足感。

平たく言えば俺には前世の記憶があつて、前世ではこの世界はポケットモンスターと呼ばれるゲームだった。

もつと言えば一部のポケモンがかわいい女の子に擬人化されてる非公式追加パッチ、萌えっ娘もんすたあ。

そこに転生したとあれば、やっぱり一度はチャンピオンという高みを目指してみたかった。

おつきなトロフィーは一度でも地方最強に輝いた実力の証左だ。

感動もひとしおというもの。

2つめは旅を終えた今、とにかく家でゆっくりしたいという事。

ここ1年くらい、休みなくジョウト、カントー地方の全てを周ってジムバッジを集めつつ各地を気の済むままパーティの皆と堪能した。

思い付くような名所には全て足を運んで、止まり木を持たず各地を転々とする毎日、マサラに籠もっていた俺や皆には何もかもが新鮮で、振り返ってみても慌ただしくも笑いの絶えない楽しい旅路だったと自信を持って言える。

しかし長い道中、何度かホームシックに襲われたのも事実。

旅から帰った今は、しばらくこの草木の香しいのどかで平穏な片田舎マサラという故郷でゆっくりと羽根を伸ばしたかった。

外に出る時顔が割れていると何かと面倒かと思つて、インタビュー等のメディア露出を受ける前にお手洗いから自宅までテレポートしたのは少し強引だったかもしれないが、それも今後の平穏な生活のためには止む無し。

原則、チャンピオンを打倒した挑戦者には現チャンピオンが任期を終えた後の時期チャンピオンとなる権利が与えられる。

とはいっても勿論断る事だつて可能で、実際チャンピオンに就任するトレーナーは少ない。

ただ、そもそもチャンピオンに勝つてポケモンリーグを制覇できる

トレーナー自体の絶対数がかなり少ないので（7〜8年に1人いるかいないかぐらい）どうあつてもメディアの注目は集めてしまう。

戦闘の様子は特別な希望がない限り地方のTVで生中継されるし（全力で断った）、もしチャンピオンに勝とうものならリーグ出口で出待ちされてその日は色々なメディアからのインタビューでてんてこ舞い。

どうしてもそれが嫌で嫌で、勝った直後に強引な手段で無理に抜け出してきてしまったのだ。

顔が売れても過ごし辛くなるだけなので、リーグの職員さんには悪いけどこのまま失踪で押し通すつもり。

噂では俺のせいでリーグ開いてないらしくてちょっとウケた、流石に一カ月もすればまた開業すると思うけど。

愛しいおっとりメイドさんが花びらを散らして気配を確認する限り、どこから嗅ぎ付けてきたのかリーグからの追っ手が最近こんな辺境にも来ているよう。

このままみすみす捕まる気はない、意地でも逃げおおしてみせる。

「あの、そろそろ……」

「もうちょっと続けたいな」

「そんな……私、駄目になってしまいます……」

この世界のポケモンの8割は通常種。

ゲームで見たような通常の姿形をしている。

そして残りの2割は変異種、雌雄を問わず眉目麗しい若い人間の姿を取る通常種よりも強力な個体だ。

有り体に言ってしまうえばこっちが萌えもん。

うちのパーティは生前俺が手塩に掛けて育てていたゲームのパーティそのまま、俺と一緒にこの世界に来てくれたようだった。

転生後の俺の部屋の引き出しの奥、ただ主人を待つようにして6個のモンスターボールが眠っていたのを見つけた時には驚いた。

なんというか不思議な感覚で、ボールを見ただけでこの娘達はかつての相棒だという確信を持たし、それはこの娘達も全く同じだったようで皆凄く距離が近かった。

こっちは通常種のイメージでいたから、6人全員綺麗な女の子になつていた事に最初こそ戸惑ったけど、今じゃ見慣れたものだ。

「このれでい、生涯御身の傍に」

ほら、この忠誠心よ。

れでいに関しての敬意と崇拜が深くて、こっちが緊張するレベル。

未だに従者とか言ってるし、旅始めて何周年経つんだこの娘は。

れでいの前でだって情けない所、恥ずかしい所は曝け出していた筈で、そんなに下から慕ってもらえるような事した覚えはないんだけど。

深窓の令嬢みたいな神秘的なれでいの顔に顔を近付けて、髪の色よりも濃い深緑の瞳を見つめゆっくりと額と額を合わせる。

まつげながつ、モデルさんみたいだ。

「これからは家族としてずっと一緒だ」

「——はい。未来永劫、護らせてくださいませ」

おでことおでこをくっ付けたまま一言一言、ゆっくり染み込まれるように眼を見て伝えると、れでいは一瞬面食らったような表情を浮かべた後、すぐいつもの気が抜けるようなぼわぼわした笑みに戻る。

穏やかな微笑からは分かりにくいけど少し耳が赤い。

そのまま2人、ニコニコしながらゆっくり額を離す。

「まず手始めに〜」

俺が出来るもっとも穏やかな表情を向けてじつとれでいを見てみると、そのままスツと何食わぬ顔で唇を寄せてくる。

「……ちよつ、どうしたどうした!?!」

「うふふつ、冗談です」

俺の眼を見て悪戯に、妖艶な笑みを浮かべれでいはそのまま視線を落とし、俺の手の甲に一つ口付けを落としてそのまま外の偵察へ行つてしまった。

れでいが出ていった扉をぼんやり眺める。

見慣れたとはいえあんな絶世の美女達、ましてその天女達6人みんな俺を信頼してずっと付いてきてくれる女の娘だ。

髪は上質な絹みたいにサラサラだし、特にれでいは草ポケモンだか

らか分からないけど、常に生花みたいな良い香りがする。

お風呂でのぼせたみたい、全身が熱い。

熱に浮かされてすっかり茹だった頭では言葉を取り繕う事もできず、匿名掲示板に投稿される出来の悪い絵空事みたいな真実が洩れる。

「……俺のポケモン達がかawaiiすぎてヤバイ」

買い出しとかする2話

「ユキト様、こっちのお肉の方が62円も安いです」

「牛乳はまだありましたか?……一応買っておきましようか。余るようならルリか深紅がごきゅごきゅ飲んでくれるでしょう」

「あつこら、すぐチョコを探しに行かないの。食料品を一通り揃えた後なら付き合ってあげますから、ね?」

近所のスーパーにて。

自分のポケモンの方が食料品の買い物さえ自分より上手い事にももう慣れたもので、経済的に買い物してくれるらんにはいつも頭が上がりません。

お金なんて使いきれないくらい持っているけど、バッジを集めようと旅してた貧乏時代の感覚がすっかり体に染み付いてしまっていたものもあるし、我らがらんお母さんの自炊ご飯がその辺のレストランより美味しいのも手伝って無駄遣いする事もなく。

買い物モードに入っただけで集中しているらんの傍をひいっと抜け出そうとしてこんな風にすぐバレてしまうのももう何回目か分からない。

「らん、なんだかお姉さんみたいだ……いつも思うけど」

「そうさせたのはユキト様達でしょう……私が付いていないとまともなご飯も食べないんですから、まったく」

毛先をうつつすら蒼く染めて、外を歩ける程度にカジュアルなアレンジのゴスロリ服。

バンギャ系私服高校生に見えるらんは、そんなビジュアルとは裏腹に僕のパーティーで一番真面目な苦労人お姉さんのシャンデラ。

僕のパーティーは僕も含めて大多数がなんかふわふわしてる連中ばかりだから、地に足付けて堅実に生きるタイプのひめとらんにはいつも苦労を掛けてます。

でも何だかんだで人に世話を焼くのが大好きな事は、呆れているような言葉ばかり言ってもほんの僅かに綻んでいる表情で伝わる。

なんの見返りもなしにただ人の役に立つ事が、そうしてお礼を言わ

れる事が何より好きな、そういう優しい娘なのだ。

「らんのそういうところが俺は大好きだよ、いつもありがとう」

「当然の事です、ご主人や皆にはいつでも健康的で居て欲しいので」

流石にらんはこんな程度の言葉じゃあ動じてくれないので、別にこつちも変に照れる事なく毎回スツと素直な言葉を言えたりする。

付き合い自体は他の娘達と同じくらいな筈なのに、不思議な安心感と包容力のある娘だ。

「らん姐さん……」

「だからだれが姐さんですか、誰が」

ゲームでは主人公のグラフィックが一人、最近の作品では後ろにポケモンがくっ付いていたりといった塩梅らしいけど、この世界では外を歩くとき、6人も連れて歩くわけにはいかない。珍しい変異種を6体も使役してるポケモナーのやべえ奴、と波風が立つからだ。日々穏やかに生きていきたい小心者の俺は、わざわざ自分から目立つ真似は極力したくない。お察してください。とはいえ、たった1人で歩くのも何だか物寂しくある。いや、皆はちゃんとボールの中に居てくれるし、なんなら結構な頻度でカタカタ揺れてたりするのだけど、それはそれとして。

つまり普段は俺と誰か1人プラスボール5個で歩いているのだけど、その誰か1人はその時々で特別な希望がない限りは大体がらんだったりする。だから、某ポケモン犯罪組織の悪事を妨害した時も、赤いギャラドスに辟易しながら戦った時も、チャンピオンロードで親友と激闘を演じたあの時だって、いつも隣に居たのはらんだった。

二の足を踏み出す事に躊躇してしまうような時、ふとした拍子にらんは俺の髪を愛おしげに撫でて、巧みに俺を鼓舞してくれた。大事なところでいつだって俺を甘やかしてくれるのだ、らんという娘は。

この世界でらんの隣に立って歩んできた大切な思い出達一つ一つを大切に慈しんでいると、袖をくいくいと引っ張られている事に気付く。ああごめんごめん、しばらく浸ってたんだ。どうしたんだら

ん。

「……」

ショックを受けた、傷付いたとかそういう感じの表情。実はこの娘、パツと見では人間味に欠ける、というより表情があんまり大きく変わらない。俺やパーティーの皆はもう一緒にいて長いから表情を見るだけで何考えてるか分かるけど、素人目には喜怒哀楽が相当分かりづらい。理論先行型の理知的で冷静な娘。

そしてらんはパーティーの中でも結構長身のクールビューティー、ぶっちゃけ俺と並んでも俺より頭一つ分くらい大きい。お母さんというのは溢れ出る母性からの冗談としても、並んで立つと割と本気でお姉さんだ。いつもふわふわしてる俺と、しつかり者のらん。2人きりを出掛ける頻度は他のメンバーよりも頭一つ抜けて多いのに、なんだか色気付いた感じの雰囲気にならない。

つまり、俺と居るとらんは結構街中で浮くのだ。弟連れの長身な無表情美人。ヤマブキシテイのような都会で俺みたいな若者に絡まれた事も沢山ある。その同じ数だけやつかみも。

「大丈夫、らんは世界一かわいいよ。ずっと頼りにしてる」

「いや、私はユキト様から綺麗に見えていればどうだっていいのですが……それにしても結構堪える……」

まあ大方、親と来てる幼児に「お姉さんなんでそんなずっと怖い顔してるの」みたいな事でも言われたんだろう、子供は無垢な分言葉を飾り立てないから残酷だ。おかん力の高い世話焼きらん姐さんは結構子供好きだから傷付いたろうけど、そんなショックを受けているらんがかわいくてしょうがないのはここだけの秘密にしたい。心ここに在らずのらんが普段なら絶対に言ってくれないようなデレを見せた事も。

「まあまあ、帰ったら俺のアイスあげるから」

「そんな子供じゃないんですから……いや、アイスは頂きますが」

「ただいまー、お、今はルリだけか、こんな少ないの珍しいな」

「おかえりー！ユツキーとらんが買い物行つてたんだー、付いて行けば良かったー……」

「呼んだのに起きなかつたろ。ほら、牛乳買ってきたぞ」

帰ってきてすぐに出迎えてくれたのはマリルリのルリ。白を基調としたカジュアルな水玉模様のワンピースに、蒼穹を思わせる青髪のツインテールが揺れる。うちのパーティ最強の露出度を誇るお洒落ワンピース一枚のみという出で立ちの彼女は、水ポケモンという性質故か年中その恰好でも別に寒さは感じないらしい。見てるこっちのが寒いわ。

「ありがとー、丁度紙パックの奴飲みたい気分だったんだー♪」

「あ、ルリ待ちなさ……、手遅れ、でしたか……」
「？」

この通り、ビジュアル的には女の子らしきMAXのボーカロイドみたいなルリは、その実わんぱくでマイペースな元気っ娘。意外と昼寝も好きなうちの奔放ムードメーカーさんは、起きている時と眠っている時のギャップが本当に凄い。ツインテールを下ろして部屋で行儀よく眠つてると良いとこのお嬢様に見える、抱き締めたら折れてしまいうような程華奢で小柄な少女なのだ。起きてる時はこうやって牛乳紙パックのまま直でゴキユゴキユ飲んでるのに。骨太くしろもつと。

「せっかくお隣さんから苺をおすそ分けしてもらったので、ミルクプリンでも作ろうと思っていたのに……」

「でもほら、こういうの見越して多めに買ってきたじゃん？」

「いや、流石に1パックまるまる全部飲まれるとは思ってませんでしたよ……」

ちなみにこういう事はよくある。うちのパーティは殆どが少食か普通ぐらいの面子だけど、ルリとまだ紹介してない深紅の2人がどんなでもないエンゲル係数を誇るので結果差し引きトントンぐらい。な

ら買い出し付き合え本気で。

「……ユツキー、帰ってきたばつかで申し訳ないんだけど……、買い物付き合って？」

さて皆さん、小首を傾げる青髪ツインテール傾国の美少女を相手に、首を横に振れるか。俺の首は縦にしか振れない。隣で頭抱えてるらんがかわいそうだしね。ほんと、いつもごめんな。

結局この日は、もうほぼ男友達みたいな距離感のルリと2人仲良く二度手間の買い物に出向き、帰るともう戻っていたパーティのみんなにミルクプリンを全部食われてたルリがマジ切れして室内でアクアテールぶちかまそうとしたりと、また一波乱あったりしたけど、何だかんだ今日も平和にやっています。